

島根県のキャリア教育推進に関する一研究（1年次）

～しまねの子どもに育てたい力～

島根県教育センター 浜田教育センター

研究・研修スタッフ、教育相談スタッフ共同研究

目 次

I	はじめに	1
II	研究の目的	2
III	研究仮説	2
IV	研究計画	2
V	研究の基盤	2
	1 キャリア教育の基本的な理解	2
	（1）キャリア教育が求められる背景	2
	（2）キャリア教育における国の主な動向	3
	2 キャリア教育先進校・先進県の視察	3
	3 島根県のキャリア教育	3
	（1）キャリア教育の推進	3
	（2）県の取組（平成25年度）	4
	（3）島根県学力調査（生活・学習意識に関する調査）報告書から	5
VI	研究内容	6
	1 島根県におけるキャリア教育で育てたい力	6
	（1）目指す子ども像の共有	6
	（2）目指す子ども像と評価内容	9
	（3）目指す子ども像のキャッチフレーズ	9
	2 しまねの子どもに育てたい力の重点化を図る指導と研究仮説との関連	9
VII	教員及び児童生徒への意識調査	10
	1 意識調査について	10
	2 意識調査の分析結果	11
VIII	今後の課題	28
IX	おわりに	29
	【参考文献・引用文献】	29
	【資料】	30

【研究の概要】

社会環境が激しく変化する中でキャリア教育の重要性が益々高まっている現在、島根県として統一感をもったキャリア教育の推進が求められる。そこで、県内教職員と児童生徒の実態を調査するとともに、本県におけるキャリア教育の推進について、目指す子ども像とその評価の在り方を中心に探った研究である。

【キーワード】

キャリア教育 目指す子ども像 評価 発達の段階

島根県のキャリア教育推進に関する一研究（1年次）

～しまねの子どもに育てたい力～

島根県教育センター浜田教育センター

研究・研修スタッフ・教育相談スタッフ共同研究

I はじめに

今日、社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化等、とどまることなく変化する社会の中で、激しい変化にも流されることなく、将来直面するであろう様々な課題に対して柔軟に且つたくましく対応できる力の育成が求められる。すなわち、子どもたち一人一人が「生きる力」を身に付け、社会人として自立していくことができる教育が求められているのである。

本県においても激しい社会環境の変化は例外ではなく、このような状況下において強くたくましく生き抜いていける子どもの育成が喫緊の課題として挙げられ、キャリア教育の重要性は益々高まっている。

これらの課題を受け、本県ではこれまでも、キャリア教育の推進に向けた施策や取組が行われてきた。その中には、地域をあげた取組から学校単位の取組まで様々なものがある。しかしながら、具体的に子どもたちにどのような力を育てていくのかという県の指針がはっきりとは示されない中での実践であったため、実施する地域や学校の実態を考慮した取組にとどまっているのが現状であるように思われる。

キャリア教育については、平成11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において、「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」とし、「学校ごとに目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある。」と提言している。また、教育基本法や学習指導要領、平成23年1月中央教育審議会答申、平成25年6月第2期教育振興基本計画等においても、その充実が掲げられており、学校教育が目指す理念や方向性を示すものと捉える必要がある。

本県においてもこのことを踏まえ、前述したように取組が行われてきたが、発達の段階に応じて目標設定しても、幼・小・中・高が同じベクトルの下で将来像を描き、連携しながらしまねの子どもを育てるという意識は弱かったように思われる。将来社会人として自立し、島根県を支える人材の一人に育ててほしいという願いを視野に入れた全県的なキャリア教育の取組が、今、大切ではないだろうか。

これらの状況を鑑み、島根県教育委員会では、しまね教育ビジョン21の改訂に伴い「キャリア教育の推進」をビジョンの大きな柱の一つとして捉え、「自立を目指すしまねの子ども教育」を構想している。

そこで、島根県教育センター浜田教育センターでは、島根県内の学校現場におけるキャリア教育に関わる取組の状況や教員のキャリア教育に対する意識の実態を捉え、これまでの取組の成果と課題を明らかにするとともに、キャリア教育でしまねの子どもに培いたい資質や能力、態度等について提案することで、今後の施策の指針づくりとなる基礎研究を行いたいと考えた。

II 研究の目的

島根県内の学校現場におけるキャリア教育に関わる取組の状況や教員のキャリア教育に対する意識の実態を捉え、これまでの取組の成果と課題を明らかにするとともに、島根県のキャリア教育が統一感をもって推進されるための在り方を探ることで、今後の施策の指針づくりとなる基礎研究を行う。

III 研究仮説

発達の段階における「しまねの子どもに育てたい力」の重点化を図った教育の推進が、統一感をもったキャリア教育を推し進め、ふるさと島根に貢献する意識を大人になってももち続けられる人づくりを目指したキャリア教育の推進につながるであろう。

IV 研究計画

本研究は、島根県教育センター浜田教育センター研究・研修スタッフ及び教育相談スタッフの共同研究として2年計画で実施する。ただし、実態調査や資料の収集においては、他の関係教育機関とも連携を図りながら進めていく。

1年次

キャリア教育に関する国や島根県の動向や指針を整理する。また、実態調査結果から島根県におけるキャリア教育の取組状況を把握し、成果や課題を整理するとともに、しまねの子どもに育てたい力を明らかにする。

- ・国、島根県のキャリア教育推進に関する動向確認（文献等による）
- ・キャリア教育先進校、先進県の視察
- ・「18歳のしまねの子どもたちに身に付けさせておきたい力や心情・態度」の類型化
- ・島根のキャリア教育で目指す子どもの具体の姿と評価項目の設定
- ・島根県の実態調査（意識調査の実施）
- ・考察（意識調査結果の分析による島根県の成果と課題の確認）

2年次

1年次研究結果を踏まえて、島根県におけるキャリア教育の一層の充実に向けた指針を提言する。

- ・島根県におけるキャリア教育推進の重点についての提言

V 研究の基盤

1 キャリア教育の基本的な理解

（1）キャリア教育が求められる背景

20世紀後半におきた社会経済・産業的環境の国際化、グローバリゼーションによる影響は、産業・職業界の構造的変革にとどまらず、我々の日常生活にも大きな影響を及ぼしている。このような社会環境の変化は、子どもたちの成育環境を変化させただけでなく、子どもたちの成長・発達にまで及び、さらに教育の目標や教育環境にも大きな影響を与え始めている。

このような社会環境の中で、子どもたちは自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことが容

易ではなくなっており、身体的には早熟傾向にあっても、精神的・社会的側面の発達が遅れがちであるなど、全人的発達がバランスよく促進されにくくなっていることが指摘されている。

今後もとどまることなく変化すると予想される社会の中で、子どもたちが希望をもって、自立的に自分の未来を切り拓いて生きていくためには、変化を恐れず、変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。

すなわち、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟に且つたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育が強く求められている。

(2) キャリア教育における国の主な動向

中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育の接続の改善について（平成11年12月）」において「キャリア教育」という文言が初めて登場し、「学校教育と職業生活との接続」の改善を図るために、小学校段階から発達の段階に応じて「キャリア教育」を実施する必要があると提言されて以来、文部科学省をはじめ、国立教育政策研究所等の機関から様々な提案が成されてきた。

平成23年、24年に相次いで、文部科学省より小学校、中学校、高等学校版の「キャリア教育の手引き」が発行され、この手引きにより、基本的な理念とともに、体系的なキャリア教育における各段階の指導内容・指導方法のほか、具体的な実践例が示された。

その他動向の詳細については、「キャリア教育の手引き」を参照されたい。

2 キャリア教育先進校・先進県の視察

全国の学校及び教育委員会等関係教育機関における先進的、或いは独創的なキャリア教育の実践について視察し学ぶことで、今後の島根県の取組の参考にしたいと考えた。

視察からは、どのような子どもを育成したいのか、将来のビジョンを県や市としてしっかりもちながら教育活動を工夫していくことが大切であることを学んだ。そのためには、子どもや地域の現状を認識するとともに、各学校がその課題や育成の方向性を共有することが大切である。

なお、視察した学校及び関係教育機関の詳細は紙面の都合により割愛する。

3 島根県のキャリア教育

(1) キャリア教育の推進

しまね教育ビジョン21では、「島根総合発展計画」や「教育基本計画」を踏まえ、本県教育を推進するための指針が示されている。

その中では、島根が目指す教育で子どもに身に付けて欲しい力として、知徳体の調和的発達をもとに、社会や人との関わりの中で、自分の生き方を考え、決定し、行動していく力や問題解決能力を身に付けることが掲げられている。

また、基本理念には、「生きる喜び」「学ぶ楽しさ」を通じてよりよく成長させること、教育の目標には個人の可能性を伸ばす「私」の面と、よりよい社会の形成者を育成する「公共」の面があるが、特によりよい社会づくりに積極的に参画する「公共」の面を重視すること、学校、家庭、地域の連携が必要であることが示されている。

そして、基本目標と施策の柱を次のように示している。

基本目標 1 心身の健康を支え、いきいきと主体的に生きるための意欲が育つ教育

施策 1-1 心身の健康を大切にした教育の推進

施策 1-2 夢を描き、その実現に向かっていく教育の推進

施策 1-3 創造性や個性の基盤となる感性を育む教育の推進

基本目標 2 社会の中で支え合い、ともに生きるための力が育つ教育

施策 2-1 互いの人権を尊重する教育の推進

施策 2-2 地域への愛着と誇りを育む教育の推進

施策 2-3 すべての子どもたちの学びを支える取組の推進

このことからわかるように、本県教育の推進においては、「社会や人との関わり」や「生き方」、「夢」、「地域への愛着と誇り」など、キャリア教育推進に関わるキーワードが示されている。そして、何よりも「しまね教育ビジョン 2.1～ふるさとを愛し、未来を切り拓く子どもを育む～」の言葉からは、キャリア教育の理念を本県教育の重点にしていることがうかがえる。

(2) 県の取組（平成 25 年度）

① 小・中学校

● 小中連携キャリア教育推進事業

幼小中・地域・市町村教育委員会が連携したキャリア教育の在り方の研究・普及を通してキャリア教育の推進を図る。

● メディカル・アカデミー

科学や医療に興味関心をもつ生徒が、地域医療を直接見て課題を知るとともに、地域医療に従事する方や地域の方から直接学ぶ機会を設け、地域医療の課題解決を志す生徒を育成する。

② 高等学校

● 地域でつなぐキャリア教育モデル事業

小学校での気づきを、なりたい自分（中学校）からなれる自分（高等学校）につなげるための小・中・高等学校の連携した取組。

● 明日のしまねを担う高校生キャリア教育推進事業（通称：あすしまキャリア）

特定の職業に従事するために必要な能力を備えた人材育成を中心に行う「働くことを学ぼう」推進事業と、地域産業の理解や地域課題の発見を通して、しまねの将来を担う人材育成を図る「未来を描こう」推進事業。

③ 教育センター研修等

● 小・中学校キャリア教育研修

● 県立学校キャリア教育担当者研修

● 初任者研修、経験者研修におけるキャリア教育研修

(3) 島根県学力調査（生活・学習意識に関する調査）報告書から

平成25年度「島根県学力調査（生活・学習意識に関する調査）」（対象：小学校第4学年から中学校第3学年までの通常の教育課程で学習している全児童生徒）からうかがえる本県児童生徒の傾向の概略を以下に示す。

概略からは、本県におけるキャリア教育推進上の成果や課題（下線部）をうかがうことができる。

①概要

- ・自尊意識に関する質問項目について、肯定的な回答の割合が増加傾向にある。「自分にはよいところがあると思う」という質問項目に肯定的な回答をした小6、中3の割合は、平成25年度全国学力・学習状況調査の全国平均に比べて高かった。
- ・各教科に対する好感度は、学年が上がるにつれ低くなる傾向があり、平成24年度に比べると、各教科・学年のうちの74%において、好感度が低下した。
- ・小学生においては、7割以上の児童が地域の行事などに参加しているが、中学生においては、その割合が平成24年度よりやや減少した。

②すべての学年で肯定的な回答の割合が70%を超えた質問項目

- ・「自分には、よいところがあると思う。」
- ・「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある。」
- ・「ものごとに最後までねばり強く取り組んでいる。」
- ・「勉強は大切だ。」
- ・「自分の好きな仕事につけるよう、勉強したい。」
- ・「分からないことでも自分の力で答えを見つけられるよう勉強したい。」
- ・「ふだんの生活や社会に出て役立つよう、勉強したい。」
- ・「国語の勉強は、生活の中で役に立つと思う。」
- ・「算数（数学）の勉強は、生活の中で役に立つと思う。」
- ・「英語の勉強は、生活の中で役に立つと思う。」 など

③すべての学年で否定的な回答の割合が50%を超えた質問項目

- ・「新聞の記事を読んでいる。」
- ・「勉強にパソコン（インターネットをふくむ）を利用して、調べたことをまとめたりしている。」
- ・「英語の辞書（電子辞書をふくむ）を使う。」 など

④教科に関する調査とのクロス分析から見える特徴

<小中共通して学力との相関が高いと考えられる質問項目>

○児童生徒の学習意欲等に関する項目

- ・「学校の授業は楽しい。」
- ・「勉強が好きだ。」
- ・「算数（数学）の勉強は好きだ。」
- ・「英語の勉強は好きだ。」（中学生のみ）
- ・「勉強は大切だ。」

○学習の内容や方法に関する項目

- ・「算数（数学）の時間に、いろいろな考え方を発表しあうことは好きだ。」
- ・「問題が解けたとき、別の解き方を考えようとしている。」
- ・「問題が解けなかったとき、なぜ解けなかったかをふり返って考えようとしている。」
- ・「分からない言葉があるときは国語辞典（電子辞書をふくむ）を使う。」

○児童生徒の生活や心情に関する項目

- ・「ものごとに最後までねばり強く取り組んでいる。」
- ・「学校に持っていくものを、前日か、その日の朝に確かめている。」
- ・「日常生活の中で、自分の思いや考えを積極的に話している。」
- ・「今住んでいる地域の行事などに参加している。」（小学生のみ）

【平成25年度島根県学力調査報告書〔島根県教育委員会〕（概略） 下線は筆者】

VI 研究内容

1 島根県におけるキャリア教育で育てたい力

(1) 目指す子ども像の共有

本県では、しまね教育ビジョン21においてキャリア教育推進の重要性が謳われてきた。更に、その改訂に伴い、「キャリア教育の推進」をビジョンの大きな柱の一つとして捉え、「自立を目指すしまねの子ども教育」を構想している。

しかし、キャリア教育において身に付けさせたい力等を示すなど、具体的な重点化は図られておらず、全県下同じベクトルでキャリア教育が推進されているとは言い難い状況も感じられる。

そこで、統一感をもったキャリア教育の推進をねらい、本県におけるキャリア教育の在り方について模索する必要があると考えた。

キャリア教育を通して、しまねの子どもにどのような力を身に付けさせたいのかを考える際にまず活用したのは、本県指導主事、社会教育主事が学校訪問指導や教職員研修等により感じ取っている思いである。一人一人が描く本県における課題や期待を基に、キャリア教育において重要と考えられる要素を抽出した。

① 研修「しまねを支える子どもを育てるために ～キャリア教育の視点から～」

島根県におけるキャリア教育の推進は、先述したように、県として示す具体的な重点化が図られておらず、同じベクトルで推進されているとは言い難い状況もある。そこで、本県のキャリア教育が統一感のある実践となるようにしたいと願い、指導主事、社会教育主事による研修を実施した。目的と内容は以下のとおりである。

ア 目的

「18歳のしまねの子どもたち（しまねを支える子ども）」に身に付けさせておきたい力や心情・態度を考えることを通して、島根県の教育実践者としての意識を高める。

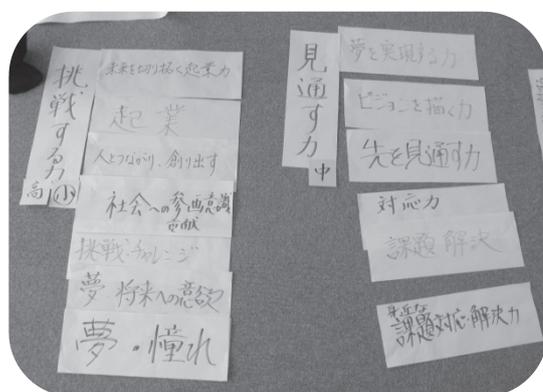
イ 内容

- ・指導主事・社会教育主事が考える「身に付けさせておきたい心情・態度」をグループ毎（2グループ）にまとめ、カテゴリーに分類する。
- ・島根のための人材育成を意識し、ふるさと島根を基盤（将来どこで働こうとも、しまねを意識していける子ども）とした統一感をもつ。

② 「18歳のしまねの子どもたちに身に付けさせておきたい力や心情・態度」の類型化

①の結果から、「18歳のしまねの子どもたちに身に付けさせておきたい力や心情・態度」について、その要素について分析した。具体的には、グループ毎に分類した「身に付けさせておきたい力や心情・態度」について、KJ法等によって再分類、整理して、「しまねの子どもに育てたい力」として重点化を図った。

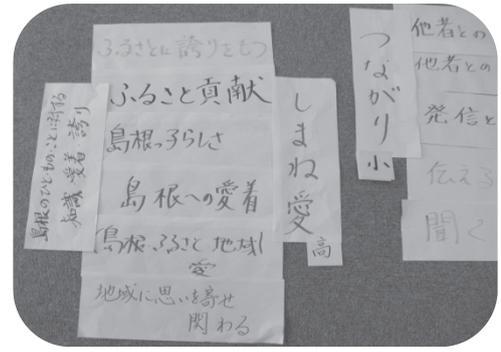
「しまねの子どもに育てたい力」として整理し重点化したのは、次の9つの力である。



【類型化作業の途中段階】

【重点化した9つの力】

「ふれる力」	「やってみる力」
「かかわる力」	「自ら学ぼうとする力」
「見通す力」	「やり抜く力」
「見つめる力」	「創り出す力」
「切り拓く力」	



【類型化作業の途中段階】

③ 発達の段階で育てたい力

②で示したそれぞれの力については、発達の段階において、継続的に、発展的に育成する必要がある。しかし、キャリア教育を推進するとき、各時期にふさわしいそれぞれのキャリア発達の課題を達成していけるような支援をしていくことが大切であり、発達の段階を踏まえた指導を考慮する必要がある。

また、県として将来どのような人に成長してほしいのかという願いを明確にもち、統一感をもって導いていくことが大切だと考える。社会や上級学校など次のステップに進もうとする段階の18歳では、社会的、職業的に自立でき、更に、ふるさとへ貢献する意識を大人になってもしっかりもち続けられる人、そのような人づくりを目指したキャリア教育の推進を支援しなければならないと考える。

そこで、②で示した力を、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の各発達の段階において、特に育てたい力に再整理し、「発達の段階で育てたい力」として重点化を図った。育てたい力の趣旨は、各発達の段階の最終段階で身に付けさせておきたい力を意識している。

図1は、発達の段階で重点化した子どもに育てたい力と、その趣旨について整理したものである。

ただし、ここに挙げた力やその趣旨は、あくまでも「しまねの子どもに育てたい力」の重点であり、ここに挙げた力をすべて育てようというものではない。また、ここに挙げた力が育てたい力のすべてとは考えていない。

<発達の段階で育てたい力の設定理由>

幼稚園（就学前）の時期は、生涯にわたる人間形成の基礎を培う時期であり、豊かな心情や物事に自分から関わろうとする意欲、健全な生活を営むために必要な態度を育成することがキャリア発達に関わる諸能力の育成につながる。これら人間形成の基礎は、幼児期の様々な体験を積み重ねる中で、そして、環境に関わって展開する具体的な活動を通じた指導の中で培われるものであるため、幼稚園の段階で特に育てたい力を「ふれる力」「やってみる力」と設定した。

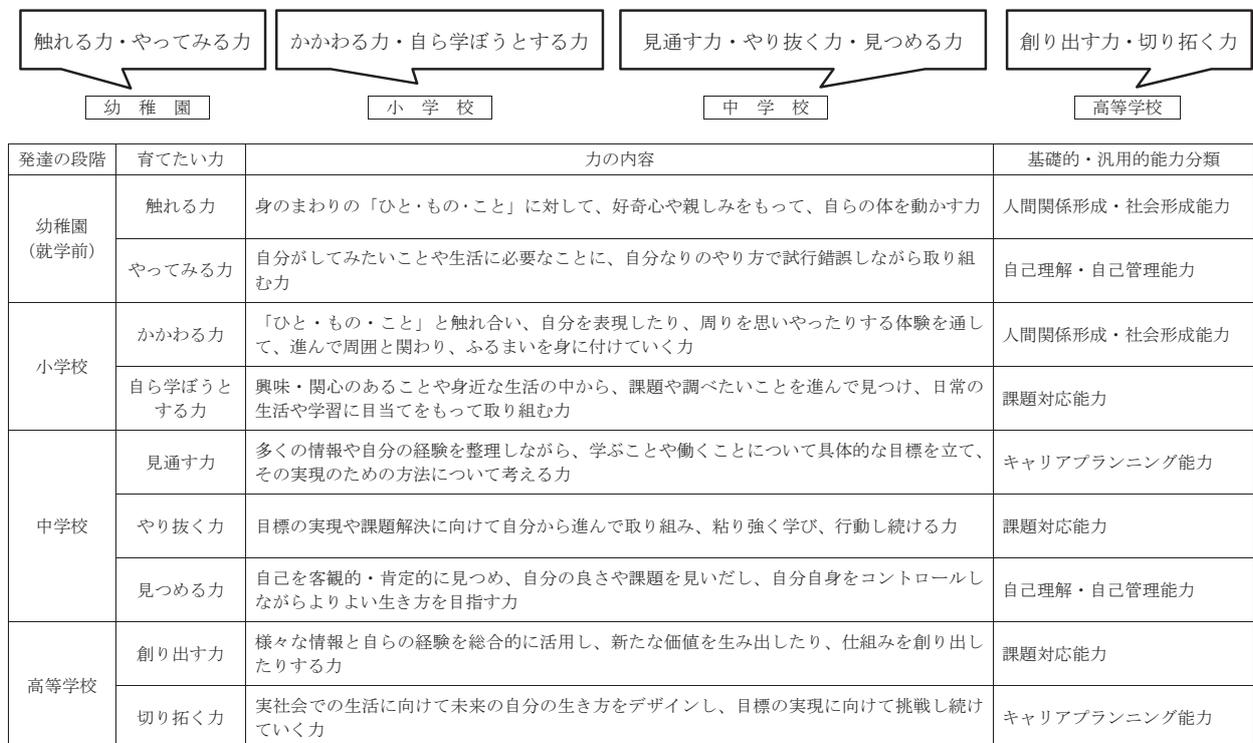
小学校の時期は、自己に関わることにポイントを置き、学校への適応からスタートする低学年から、自己と他者や集団との関わりについての発達課題が中心となる中学年を経て、リーダーシップを発揮する存在となり、集団の中での役割を自覚したり、更に社会と関わったりする

ことを重視する高学年の段階へと発達する特徴があることを理解し、支援することが大切である。また、発達の段階に応じて、自分の好きなもの、大切なものをもち、進んで取り組み、見付けた課題を自分の力で解決しようとする特徴がある。このことを鑑み、小学校の段階で特に育てたい力として、「かかわる力」「自ら学ぼうとする力」を設定した。

中学校の時期は、社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかり考えさせるとともに、目標を立てて計画的に取り組む態度の育成等について、体験を通じて理解を深めさせることが求められる。そして、生き方や進路選択・決定に関して、現実的に探索する一方で、実現に向けて粘り強く取り組ませることが重要であることから、中学校の段階で特に育てたい力として、「見通す力」「やり抜く力」「見つめる力」を設定した。

高等学校の時期は、「自己理解の深化と自己受容」「選択基準としての勤労観・職業観の確立」「将来設計の立案と社会的移行の準備」「進路の現実の吟味と試行的参加」が特に重要な課題となる。また、高等学校の時期は社会人・職業人として自立が迫られる時期であるという側面から見て、社会人・職業人に共通して必要な能力や態度の育成がとりわけ重要な意味をもつ。我が国における激しい社会環境の変化や島根県における同様な変化、とりわけ高齢化や人口減、就業に関すること等、島根県特有の課題について考えるとき、生徒には自分が将来社会に参画していくための力をしっかりと養ってほしい。そこには、生まれ育ったふるさとに対する思いをもち、しまねに貢献できる人材に育ててほしいという願いも含まれている。そこで、高等学校の段階で特に育てたい力として、「創り出す力」「切り拓く力」を設定した。

【図1】 島根のキャリア教育構造図 発達の段階で育てたい力(案)



(2) 目指す子ども像と評価内容

それぞれの発達の段階で示した力を身に付けた子どもとは具体的にどのような姿なのか。また、学校現場でどのように評価すればよいのかを示す指標が必要であると考え、示した力に関わる子どもの具体の姿を評価内容として整理した。評価項目は基礎的・汎用的能力で区分しており、評価項目に示した子どもの姿は、指導主事・社会教育主事の研修の際に示された一人一人が描く目指す子ども像を再整理したものである。また、評価項目は育てたい力の要素のカテゴリーに分類してある。(終末の【資料】を参照)

前述したように、ここに示す力がすべてではなく、示した力をすべて育成しようとするものでもない。したがって、各学校においては、これを参考にしながら状況に応じて重点化を図ったり、指導の工夫をしたりして、子どもの実質的なキャリア発達を目指してほしいと考えている。ただし、学校の実態に応じた指導の工夫を行うが、その先には本県が目指す子ども像があるということを見据えておくことが大切である。

更に、評価内容はすべてが並列ではなく、発達の段階により軽重があると考え。継続的に、発展的に育成する必要があるものの、各時期にふさわしいキャリア発達の課題を達成していけるような支援をしていくことが大切であることから、発達の段階に応じて重点化を図る指導の目安を「発達の段階で育てたい力の重点」として示してある。

(3) 目指す子ども像のキャッチフレーズ

(1)及び(2)で記述した「しまねの子どもに育てたい力」を備えた子ども像について、各校種の教員にその大枠を捉えやすくし、県下の教員が統一感をもってキャリア教育を推進していけるように、発達の段階ごとの子ども像をキャッチフレーズとして表した。

幼稚園：「ひと・もの・こと」に対して親しみをもち、自分から動く子ども。

小学校：「ひと・もの・こと」とふれ合い、ふるまいを身に付け、課題やめあてをもって学ぼうとする子ども。

中学校：自分を理解し、社会に役立つ夢をもちながら、あきらめず努力する子ども。

高等学校：ふるさと意識をもち、将来の目標の実現に向けてチャレンジする子ども。



社会・上級学校：社会的・職業的に自立し、ふるさとへの貢献意識をもち続ける若者。

このキャッチフレーズの下、島根県のキャリア教育が同じベクトルで推進されることを期待する。

2 しまねの子どもに育てたい力の重点化を図る指導と研究仮説との関連

〔VI 研究内容〕の〔1 島根県におけるキャリア教育で育てたい力〕では、発達の段階に応じたキャリア発達の課題を達成していけるような支援が大切であると述べた。したがって、発達の段階に応じて、次のことを重視した支援の推進が島根県の目指すキャリア教育の推進につながると考える。

幼稚園：「ひと・もの・こと」に対して親しみをもち、自分から動く子どもを意識した支援。
 小学校：「ひと・もの・こと」とふれ合い、ふるまいを身に付け、課題やめあてをもって学ぼうとする子どもを意識した支援。
 中学校：自分を理解し、社会に役立つ夢をもちながら、あきらめず努力する子どもを意識した支援。
 高等学校：ふるさと意識をもち、将来の目標の実現に向けてチャレンジする子どもを意識した支援。

このことを踏まえると具体的な研究仮説は、「島根県における幼稚園・小学校・中学校・高等学校それぞれの発達の段階に応じて、子どもに育てたい力の育成を目指した支援を行い、同じベクトルの下で教育活動を推進していけば、統一感をもったキャリア教育が推し進められ、ふるさと島根へ貢献する意識を大人になってももち続けられる人づくりを目指したキャリア教育の推進につながるであろう。」となる。

この仮説を検証するための一つとして、「発達の段階で育てたい力」を踏まえた調査を行い、本県の教員及び児童生徒の実態を探ることが必要と考える。

Ⅶ 教員及び児童生徒への意識調査

1 意識調査について

(1) 調査の趣旨

島根県内教員のキャリア教育に対する意識や取組の実態、及び児童生徒の実態を調査し、現状を認識する。特に、児童生徒の実態と教員の指導の実態との関連から、本県における今後のキャリア教育推進の在り方を探る。また、本県のキャリア教育における今後の施策の指針づくりとなる基礎調査とする。

(2) 調査の内容

教員及び児童生徒を対象とした質問紙による調査

(3) 調査の実施時期

平成26年1月20日～2月1日

(4) 調査の対象校

地域性と学校種、学校規模を考慮した抽出により、幼稚園6園、小学校11校、中学校9校、高等学校6校、特別支援学校6校を対象とした。

(5) 調査対象数（回収率 教員82.8% 児童生徒92.4%）

・幼稚園教員（管理職、教諭、講師）	44名
・小学校教員（管理職、教諭、養護教諭、講師）	165名、6年生児童222名
・中学校教員（管理職、教諭、養護教諭、講師）	147名、3年生生徒212名
・高等学校教員（管理職、教諭、養護教諭、講師）	198名、2年生生徒174名
・特別支援学校教員（管理職、教諭、養護教諭、講師）	141名
・キャリア教育担当者（幼・小・中・高・特）	32名

合計： 教員 727名、 児童生徒 608名

(6) 分析について

主として各調査票における個別の設問への回答を整理した。

本紀要では、児童生徒の実態（日常生活の振り返り）と教員の指導の重点に係る設問について特性を整理するとともに、その関連性を整理し、その結果を中心に掲載した。

2 意識調査の分析結果

小学校・中学校・高等学校の分析については、キャリア教育における教員の指導の重点及び児童生徒の日常生活からうかがえる実態の特徴と、両者の関連を中心に行った。また、幼稚園教員、特別支援学校教員、キャリア教育担当者の分析については対象が教員のみであるため、各対象教員の意識の概要を分析結果として記載する。

なお、小学校・中学校・高等学校の分析において、①（教員の意識）及び②（児童生徒の意識）の分析中の「肯定的な回答」とは、「当てはまる」「やや当てはまる」に該当する回答を指す。また、③（「発達の段階で育てたい力の重点」との関連）の分析については、当センターが考える「発達の段階で育てたい力の重点」と教員の指導、児童生徒の実態との関連をより明確に探るため、「当てはまる」に該当する回答で分析した。

各分析結果の記載に係る教員及び児童生徒に対する質問項目や項目数については、以下を参照されたい。また、意識調査データの分析結果についてはP. 21、P. 22に示してある。

【教員及び児童生徒の質問項目】

教員質問「どのようなことに重点を置いて指導していますか。」

- ① 様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き、理解しようとする事
- ② 困っている友達を助けたり、頑張っている人を応援しようとしたりする気持ちを育てること
- ③ 相手や場所に合ったあいさつや言葉遣いができるようにすること
- ④ 相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること
- ⑤ 地域の自然や文化などのよさについて理解したり、地域の人と積極的に関わったりすること
- ⑥ 自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること
- ⑦ 喜怒哀楽の感情に流されず、自分の行動を適切に律して取り組もうとすること
- ⑧ あまりやる気が起きないときでも、自分がすべきことには取り組もうとすること
- ⑨ 児童生徒一人一人が学級や学校での存在意義を感じ取れるようにすること
- ⑩ 身近な生活の中から課題を進んで見つけ、その解決に向けて目標をもって取り組もうとすること
- ⑪ 活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりしながら、粘り強く取り組もうとすること
- ⑫ 今までの経験や様々な情報を活用しながら、新たに考えたり、作り出したりすること
- ⑬ 学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること
- ⑭ 自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること
- ⑮ 自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること
- ⑯ 学級で物事を決めるとき、よりよくするために自分の意見を伝えること
- ⑰ ふるさと意識の向上や、ふるさとへ貢献しようとする意欲を高めること

児童生徒質問「あなたの日常生活の様子を振り返って教えてください。」 ()は中・高に対応

- ① みんなと仲良くしようとしている。(誰に対しても公平に同じような態度でかわろうとしている。)
- ② 相手の立場を考えて、その人の考えや気持ちを受け止めようとしている。
- ③ 困っている人に声をかけたり、助けようとしていたりしている。
- ④ 頑張っている人に対して、応援(おうえん)しようとする気持ちをもっている。
- ⑤ 相手や場所に合ったあいさつや言葉づかいをしようとしている。
- ⑥ 相手がわかりやすいように意識しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしている。

- ⑦ 今住んでいる地域の自然や文化などのよさについて、身近な人に話すことができる。(今住んでいる地域の自然や文化などのよさについて、身近な人に話すことができる。)
- ⑧ 今住んでいる地域の行事に積極的に参加したりしている。
- ⑨ 自分の得意なことや苦手なことが言える。
- ⑩ あまりやる気が起きないときでも、自分がやらなければならないことには取り組もうとしている。
- ⑪ 人の役に立っていると感じることもある。
- ⑫ 日常の生活や学習にめあてをもっている。
- ⑬ 日常の生活や学習のめあてに向かって努力している。
- ⑭ 問題を解決するために、自分から進んで取り組もうとしている。
- ⑮ ものごとにねばり強く取り組んでいる。
- ⑯ 問題を解決するために、いろいろなやり方を考えようとしている。
- ⑰ まわりの人の考えを参考にして、自分の考えに生かそうとしている。
- ⑱ わからないことや知りたいことがあるとき、進んで調べたり、誰かに質問したりしている。
- ⑲ 将来の夢や目標がある。
- ⑳ 将来やってみたい仕事がある。
- ㉑ 何かをするときには、先を見通して計画的に取り組んでいる。
- ㉒ 将来の目標に向かって、普段の生活や勉強の仕方を工夫している。
- ㉓ 友達と物事を決めるときに、よりよくするために、自分の意見を伝えようとしている。
- ㉔ 将来、世の中やふるさとのために役立ちたいと思っている。

(1) 小学校教員及び児童分析

① 教員の意識

小学校において、肯定的な回答の平均値は79.4%、最も高い(96.9%)項目は③、最も低い(40.3%)項目は⑭であった。

肯定的な回答の割合が高かった項目は、順に次の5項目である。これらを重点上位群とする。

- | | |
|---|-------|
| 1 相手や場所に応じたあいさつや言葉づかいができるようにすること | (項目③) |
| 2 困っている友達を助けたり、頑張っている人を応援しようとしたりする気持ちを育てること | (項目②) |
| 3 相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること | (項目④) |
| 4 様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き、理解しようとする事 | (項目①) |
| 5 児童生徒一人一人が学級や学校での存在意義を感じ取れるようにすること | (項目⑨) |

重点上位群のうち4つ(項目①~④)までは、「しまねの子どもに育てたい力」で挙げた「ふれる力」「かかわる力」に関連付けている項目である。また、このうち、4項目(項目①②③⑨)が、小学校の「発達の段階で育てたい力の重点」の項目とも一致する。

一方、肯定的な回答の割合が低い順に5項目挙げると以下の通りである。これらを重点下位群とする。

- | | |
|--|-------|
| 13 学ぶことや働くことの意義について理解し、学校での学習と自分の将来をつなげて考えること | (項目⑬) |
| 14 今までの経験や様々な情報を活用しながら、新たに考えたり、作り出したりすること | (項目⑫) |
| 15 ふるさと意識の向上や、ふるさとへ貢献しようとする意欲を高めること | (項目⑰) |
| 16 自分の将来の目標の実現に向かって具体的に行動したり、その方法を工夫・改善したりすること | (項目⑮) |
| 17 自分の将来について具体的な目標を立て、現実を考えながらその実現のための方法を考えること | (項目⑭) |

重点下位群のうち、4つ（項目⑬⑮⑯⑰）は、「しまねの子どもに育てたい力」で挙げた「見通す力」「切り拓く力」に関連付けている項目である。

以上の結果から、小学校教員がキャリア教育を行う際の意識の傾向として、ふるまいや規律、自己理解や人間関係づくり等の視点を持ち、重点的に指導している傾向が見られる。

反対に、将来の目標設定やその実現に関する指導については、他の内容と比べ意識が低いと思われる、「発達の段階で育てたい力の重点」ともずれがあった。

また、地域参加やふるさと貢献に関する指導では、意識はしているものの、具体的な取組の実現に難しさを感じている傾向が見られる。

② 児童の意識

肯定的な回答の平均値は82.1%、最も高い（97.7%）項目は①、最も低い（67.9%）項目は②であった。

肯定的な回答の割合が高かった項目は、順に次の5項目である。これらを高意識群とする。

- | | |
|-------------------------------------|-------|
| 1 誰に対しても公平に、同じような態度でかかわろうとしている。 | （項目①） |
| 2 相手の立場を考えて、その人の考えや気持ちを受け止めようとしている。 | （項目②） |
| 3 相手や場所に応じたあいさつや言葉づかいをしようとしている。 | （項目⑤） |
| 4 頑張っている人に対して、応援しようとする気持ちをもっている。 | （項目④） |
| 5 自分の長所や短所が言える。 | （項目⑨） |

高意識群のうち4つ（項目①②④⑤）は、「しまねの子どもに育てたい力」で挙げた、「ふれる力」「かかわる力」に関連付けている項目である。特に、「つながろうとする意欲」が育ってきていることがアンケート結果からうかがえる。一方、肯定的な回答の割合が低い順に5項目あげると以下の通りである。これを低意識群とする。

- | | |
|---|-------|
| 20 問題を解決するために、自分から進んで取り組もうとしている。 | （項目⑭） |
| 21 日常生活や学習に目標をもっている。 | （項目⑫） |
| 22 今住んでいる地域の自然や文化などのよさについて、身近な人に話すことができる。 | （項目⑦） |
| 23 今住んでいる地域の行事に積極的に参加している。 | （項目⑧） |
| 24 将来の目標に向かって、普段の生活や勉強の仕方を工夫している。 | （項目⑳） |

低意識群の中でも、「しまねの子どもに育てたい力」に挙げた「地域への愛着と誇り」に関する項目（項目⑦⑧）の自己評価は低かった。

以上の結果から、小学校児童の傾向として、他者との関わりを意識した良好な人間関係づくりを強く意識していることが想像される。その中で自己を認識したり振り返ったりしながら、自分の長所や短所を認知しているものと予想される。一方、他の項目に比べ、日常生活における目標設定や自己実現のための意識が低いと想像され、将来の目標に向かう意欲にも影響していることも考えられる。また、社会やふるさとに貢献したいという意識はあるものの、地域社会に主体的に関わる実践意欲にまで高まっていないものと予想される。

③ 「発達段階の重点」との関連

ア 「ふれる力」「かかわる力」について

「つながろうとする意欲」「コミュニケーション・スキル」については、児童、教員のアンケート結果ともに上位を占めており、指導の成果が現れ、児童に「つながろうとする意欲」や「コミュニケーション・スキル」が身に付いてきていることがうかがえる。ただし、児童アンケート項目①と②③を比べると、はっきり「はい」と答えている数値に少し開きがあり、他者への関わりにおいて、自信のなさも見られる。今後は、児童の思いを大切にする中で、より実践的な態度が身に付けられるような指導も大切であると考えられる。

反対に、「地域への愛着と誇り」については、児童、教員アンケート結果ともに低い結果となった。このことから、地域素材を活用した学習から、児童に地域の良さが感じられるような指導の工夫が求められると考える。

イ 「やってみる力」「見つめる力」について

「自己有用感」については、児童アンケート結果（項目⑪）は24番目で最下位、これに対して、教員アンケート結果（項目⑨）は3番目という上位の結果であった。この項目を重点と考え指導しているにもかかわらず、その成果が現れていない。今後は、児童の「自己有用感」が高められるような、指導の改善、工夫が必要であると考えられる。

ウ 「自ら学ぼうとする力」「やり抜く力」「創り出す力」について

「学ぶ意欲」「前向きに行動する力」については、児童アンケート結果（項目⑫⑬）は20番目、14番目と低い結果であり、特に、「学ぶ意欲」に弱みを感じる。また、教員アンケート結果（項目⑩）は9番目で、指導の重点として意識されて行われているとも言えない状況であった。今後は、児童の実態を踏まえ、児童の「学ぶ意欲」が高められるような指導の充実が求められる。

また、「見極める力」については、児童アンケート結果（項目⑱）は9番目、教員アンケート結果（項目⑫）は15番目で、指導の重点として挙げられていないわりに、児童の自己評価は比較的高い結果となった。これは、教員側から意図的に指導された結果ではなく、日常の学習を通して、こうした、「進んで調べる力」や「進んで聞く力」が児童に育ってきたものだと考えられる。

エ 「見通す力」「切り拓く力」について

「夢・目標」については、児童アンケート結果（項目⑳）は2番目で、教員アンケート結果（項目⑭）は16番目で、この項目についても、指導の重点として挙げられていないわりに、児童の自己評価が高い結果となった。児童は、これまでの生活経験の中で、自分の将来に向けての「夢・目標」を持っていることが、アンケート結果からうかがえる。そうした実態を踏まえ、「夢・目標」の実現につながるような指導や支援の仕方が今後は求められると考える。

(2) 中学校教員及び生徒分析

① 教員の意識

肯定的な回答の割合の平均は77.5%、最も高い(96.5%)項目は③、最も低い(52.8%)項目は⑫であった。重点上位群5項目は次の項目である。

- | | |
|--------------------------------------|-------|
| 1 相手や場所に応じたあいさつや言葉遣いができるようにすること | (項目③) |
| 2 様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き、理解しようとする | (項目①) |
| 3 相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること | (項目④) |
| 4 困っている友達を助けたり、頑張っている人を応援しようとする気持ち | (項目②) |
| 5 あまりやる気が起きないときでも、自分がすべきことには取り組もうとする | (項目⑧) |

重点上位群のうち4項目(①②③④)は、「しまねの子どもに育てたい力」で挙げた「ふれる力」「かかわる力」に関連付けている項目である。また、項目②⑧は、中学校の「発達の段階で育てたい力の重点」の項目とも一致する。一方、重点下位群5項目は次のとおりである。

- | | |
|---|-------|
| 1 今までの経験や様々な情報を活用しながら、新たに考えたり、つくり出したりすること | (項目⑫) |
| 2 ふるさと意識の向上や、ふるさとへ貢献しようとする意欲を高めること | (項目⑬) |
| 3 地域の自然や文化などのよさについて知ったり、地域の人と積極的にかかわったりすること | (項目⑤) |
| 4 活動する際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりしながら、粘り強く取り組もうとする | (項目⑪) |
| 5 身近な生活の中から課題を進んで見付け、その解決に向けて目標をもって取り組もうとする | (項目⑩) |

重点下位群は、「しまねの子どもに育てたい力」の「ふれる力」「かかわる力」(項目⑤)、「自ら学ぼうとする力」「やり抜く力」「創り出す力」(項目⑩⑪⑫)、「見通す力」「切り拓く力」(項目⑬)に分散している。

以上の結果から、中学校教員がキャリア教育を行う際の意識の傾向は、ふるまいや規律、他者への関わりやつながり、生徒が自己をコントロールすることに視点をもち、重点的に指導していると考えられる。

一方、地域への愛着と誇りに関する指導や課題対応能力に関する指導について、教員の指導が重点化されていない傾向にあることがわかった。中学校における「発達の段階の重点」に対応した教員の指導の重点(項目②⑥⑦⑧⑩⑪⑭)と比較すると、項目②⑧は重点上位群に属し、項目⑩⑪は重点下位群に属していた。したがって、課題を解決しようとする力を育てる指導の充実が必要であると考えられる。

② 生徒の意識

肯定的な回答の割合の平均は76.4%、最も高い(95.3%)項目は②、最も低い(52.7%)項目は⑧であった。高意識群は、高い順に次の5項目である。

- | | |
|--|-------|
| 1 相手の立場を考えて、その人の考えや気持ちを受け止めようとしている | (項目②) |
| 2 相手や場所に応じたあいさつや言葉づかいをしようとしている | (項目⑤) |
| 3 頑張っている人に対して、応援しようとする気持ちを持っている | (項目④) |
| 4 誰に対しても公平に、同じような態度でかかわろうとしている | (項目①) |
| 5 相手がわかりやすいように意識しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしている | (項目⑥) |

高意識群 5 項目はいずれも、「しまねの子どもに育てたい力」の「ふれる力」「かかわる力」に関連する項目であった。次に、低意識群は低い順に次の 5 項目である。

- | | |
|---|-------|
| 1 今住んでいる地域の行事に積極的に参加している | (項目⑧) |
| 2 将来の目標に向かって、普段の生活や勉強の仕方を工夫している | (項目⑫) |
| 3 今住んでいる地域の自然や文化などのよさについて、身近な人に話すことができる | (項目⑦) |
| 4 何かをするときには、先を見通して計画的に取り組んでいる | (項目⑭) |
| 5 人の役に立っていると感じることもある | (項目⑩) |

低意識群は、「しまねの子どもに育てたい力」の「ふれる力」「かかわる力」(項目⑦⑧)、「やってみる力」「見つめる力」(項目⑩)、「見通す力」「切り拓く力」(項目⑭⑮)に分散している。

以上の結果から、中学校生徒は他者への関わりやつながりに対する意識(項目①②④⑤⑥)は高く、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら自己の成長を果たしていこうとする能力が発揮されているものの、地域への愛着と誇りに関する意識(項目⑦⑧)や他者の役に立っているという意識(項目⑩)が低い傾向にあると言える。また、項目⑭⑮については「目標を立てて計画的に取り組む態度の育成等について、体験を通じて理解を深めさせることが求められる」ことから、キャリアプランニング能力の育成に課題があると考えられる。

③ 「発達の段階の重点」との関連

ア 「ふれる力」「かかわる力」について

教員アンケート項目②は全体の 2 番目、生徒アンケート項目④は 2 番目と高い。このことから、自己と他者や適切な関係を構築していく力を身に付けていく時期として重点的に指導していることがうかがえる。同時に、中学生として求める姿が形成されていると言える。

しかし、生徒アンケート項目④に比べると同項目③は 10 番目という結果である。このことから、気持ちや意識は高まっているが、行動面に反映しようとする意識の低さがうかがえる。指導にあたっては、より一層気持ちを育てることに重点をおくとともに、行動に表すことができるよう指導を行っていくことが大切であると言える。

イ 「やってみる力」「見つめる力」について

教員アンケート項目⑥は全体のうち 9 番目、生徒アンケート項目⑨は 7 番目という結果である。生徒が肯定的に捉えているのに対し、教員の指導への意識が低いことがわかる。中学校においては肯定的自己理解と自己有用感の獲得が望まれる。指導に当たっては、長所や短所を気付くだけにとどまらない指導が重点的になされる必要がある。

また、教員アンケート項目⑦は 7 番目、同項目⑧については 6 番目である。同項目⑥同様、肯定的自己理解・自己有用感の獲得の時期であることを考えると、「よく指導している」との

回答が2割しかないことは指導への課題である。また、これに対する生徒のアンケート項目⑩は10番目という結果である。生徒の自己をコントロールする力を高めるためにも、主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、且つ今後の成長のために進んで学ぼうとする力を育成する必要があると言える。

ウ 「自ら学ぼうとする力」「やり抜く力」「創り出す力」について

教員アンケート項目⑩は13番目、これに対する生徒アンケート項目⑭は18番目という結果である。また教員アンケート項目⑪は14番目、これに対する生徒アンケート⑮は14番目に位置する。中学校3年生という時期は、自分の意志で進路を決定しなければならない時期であるが、この結果からは目標に向かって取り組む姿勢がやや弱いことがうかがえる。「自分から進んで」「粘り強く」といった主体的に解決していこうとする観点で捉えると、対象に向かって成し遂げる達成感を味わった体験や経験の不足が、この項目の低さの背景にあるとも考えられる。そのことを踏まえ、日常生活の様々な場面において計画的に物事に取り組み、やり遂げると共に振り返る活動を充実させる必要があると言える。また、教員が課題対応能力の育成を重点として捉えていない現状があり、そのことがより一層生徒の意識の低さにつながっていると考えられる。

エ 「見通す力」「切り拓く力」について

生徒アンケート項目⑲は4番目と高いが、同項目⑳は24番目と最下位である。また、教員アンケート項目⑭は10番目という結果である。夢や目標を抱いている生徒が多い一方、目標を立てて計画的に取り組む態度が弱いことがうかがえ、キャリアプランニング能力の育成に課題があると考えられる。中学生は、現実的に進路の選択を迫られ、自分の意思と責任で決定しなければならない時期である。このことを考えると、自らの生き方等について目標を立てて計画的に取り組む、さらに体験を通じて理解を深めさせる指導の充実が望まれる。

(3) 高等学校教員及び生徒分析

① 教員の意識

肯定的な回答の割合の平均は72.2%、最も高い(96.7%)項目は③、最も低い(39.0%)項目は⑰であった。

重点上位群は、順に次の5項目である。

- | | | |
|---|---|-------|
| 1 | 相手や場所に応じたあいさつや言葉遣いができるようにすること | (項目③) |
| 2 | 困っている友達を助けたり、頑張っている人を応援しようとしたりする気持ちを育てること | (項目②) |
| 3 | あまりやる気が起きないときでも、自分がすべきことには取り組もうとすること | (項目⑧) |
| 4 | 相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを伝えること | (項目④) |
| 5 | 様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き、理解しようとする事 | (項目①) |

これらの項目はすべて、「しまねの子どもに育てたい力」の「ふれる力」「かかわる力」に関連するものであった。

一方、重点下位群を5項目挙げると、次の通りである。

- | | | |
|---|---|-------|
| 1 | ふるさと意識の向上や、ふるさとへ貢献しようとする意欲を高めること | (項目⑱) |
| 2 | 地域の自然や文化などのよさについて知ったり、地域の人と積極的にかかわったりすること | (項目⑤) |
| 3 | 今までの経験や様々な情報を活用しながら、新たに考えたり、つくり出したりすること | (項目⑫) |
| 4 | 学級で物事を決めるとき、よりよくするために自分の意見を伝えること | (項目⑯) |
| 5 | 活動する際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりしながら、粘り強く取り組もうとすること | (項目⑰) |

高等学校における「発達の段階で育てたい力の重点」9項目(④⑤⑨⑫⑬⑭⑮⑯⑰)については、項目④は重点上位群に属し、項目⑤⑫⑯⑰は重点下位群に属していた。「発達の段階で育てたい力の重点」9項目のうち半分程度は、教員の指導の重点化がなされていない傾向があることがわかった。

② 生徒の意識

肯定的な回答の割合の平均値は65.3%で、最も高い(90.4%)項目は⑤、最も低い(30.4%)項目は⑧であった。高意識群の項目は、順に次の5項目である。

- | | | |
|---|-----------------------------------|-------|
| 1 | 相手や場所に応じたあいさつや言葉づかいをしようとしている。 | (項目⑤) |
| 2 | 相手の立場を考えて、その人の考えや気持ちを受け止めようとしている。 | (項目②) |
| 3 | 頑張っている人に対して、応援しようとする気持ちをもっている。 | (項目④) |
| 4 | 誰に対しても公平に、同じような態度でかかわろうとしている。 | (項目①) |
| 5 | まわりの人の考えを参考にして、自分の考えに生かそうとしている。 | (項目⑰) |

この結果から、高意識群に属する項目は、「しまねの子どもに育てたい力」の「ふれる力」「かかわる力」「自ら学ぼうとする力」「やりぬく力」「創り出す力」に関連するものであった。

一方、低意識群を5項目挙げると次の通りである。

- | | | |
|---|--|-------|
| 1 | 今住んでいる地域の行事に積極的に参加している。 | (項目⑧) |
| 2 | 将来の目標に向かって、普段の生活や勉強の仕方を工夫している。 | (項目⑳) |
| 3 | 人の役に立っていると感じることもある。 | (項目⑪) |
| 4 | 今住んでいる地域の自然や文化などのよさについて、身近な人に話すことができる。 | (項目⑦) |
| 5 | 日常の生活や学習の目標に向かって努力している。 | (項目⑬) |

各項目が「しまねの子どもたちに育てたい力」のそれぞれに分散して関連していた。高意識群が関連している「ふれる力」「かかわる力」であっても、評価項目(案)レベルでは、低い割合の項目があることから、「しまねの子どもたちに育てたい力」レベルで大局的に評価するとともに、評価項目(案)レベルで目指す生徒像を描いてキャリア教育を実施することで、生徒や学校の実態に応じたキャリア教育になるものと考えられる。

また、高等学校段階における「発達の段階で育てたい力の重点」8項目(⑥⑦⑪⑰⑳㉑㉒㉓㉔)

については、高意識群に属する項目が1つ(⑰)、低意識群に属する項目が3つ(⑦⑪⑳)あった。

③ 「発達の段階で育てたい力の重点」との関連

ア 「ふれる力」「かかわる力」について

生徒アンケート項目⑥は、11番目の結果が表れている。しかし、教員アンケート項目④については、3番目の結果となっている。

このことから、教員の意識とは対照的に生徒にとっては、十分なコミュニケーション・スキルが身に付いているという意識が高まっていないことがわかる。

また、生徒アンケート項目⑦では、20番目の結果であった。この実態と関連して、教員アンケート項目⑤は、最下位の結果となっている。

このことから、地域への愛着や誇りを育てることを目的とした教育活動の充実が強く求められると考えられる。

イ 「やってみる力」「見つめる力」について

生徒アンケート項目⑪は、最下位の結果となっている。しかし、教員アンケート項目⑨では、8番目の結果となっている。

このことから、ホームルーム活動などにおいて、これまで以上に自己を客観的且つ肯定的に見つめることで、自分自身のよさや課題を認識できるような指導を行っていく必要があると考えられる。

ウ 「自ら学ぼうとする力」「やり抜く力」「創り出す力」について

生徒アンケート項目⑰は、8番目に位置する。しかし、教員アンケート項目⑫は、15番目に位置している。

このことから、様々な教育活動の場面を通して、これまでの経験や周りの情報等を総合的に活用して、新たな価値を生み出したり、仕組みを創り出したりするなど、物事を見極める力を育てていくための指導を充実させていく必要があると考えられる。

エ 「見通す力」「切り拓く力」について

生徒アンケート項目⑱及び同⑳は、それぞれ4番目、2番目に位置している。しかし、同㉑では、13位という結果にとどまっている。この実態に関連して、教員アンケート項目⑭は、10番目に位置している。

このことから、学ぶことと働くことの意義を理解させるとともに、夢や目標を実現していくための具体的な方法を見い出し、見通しをもって実現していく力を育てていくための指導を充実させていく必要があると考えられる。

(4) 小・中・高等学校における教員と児童生徒の全体像

教員アンケートの指導の重点と児童生徒アンケートの日常生活の様子について、結果からうかがえる本県の特性を整理した。

① どの校種にも共通している傾向

ア 人間関係形成・社会形成能力に関する項目について(「ふれる力」「かかわる力」)

○「つながろうとする意欲」「コミュニケーション・スキル」については、どの教員、児童生

徒にも高い数値が見られる。教員の指導では、集団の中で豊かな人間関係を築くため、特に「コミュニケーション・スキル」に関する指導に力を入れていることがうかがえる。

- 地域との関わりを通して人間関係形成・社会形成能力を育むという「地域への愛着や誇り」の視点については、教員の指導の意識も児童生徒の実態も他の項目に比べてやや低いことが認められる。

イ 自己理解・自己管理能力に関する項目について（「やってみる力」「見つめる力」）

- 「自己有用感」の育ちにおいて、どの校種の児童生徒の肯定的な回答も低い。教員の指導においては全校種において重点化が図られているとは言い難く、指導が成果に結びついていない面もうかがえるため、発達の段階に応じた指導の工夫改善という点で課題が考えられる。

ウ 課題対応能力に関する項目について（「自ら学ぼうとする力」「やり抜く力」「創り出す力」）

- 教員に共通して低い項目は「見極める力」に関する指導である。他にも「課題解決に向けて目標をもって取り組もうとすること」「計画を立て、改善等しながら粘り強く取り組もうとすること」など、「課題を解決しようとする力」については肯定的な回答の割合が低く、今後、支援が必要となる可能性がある。

エ キャリアプランニング能力に関する項目について（「見通す力」「切り拓く力」）

- 「夢・目標」に関しては指導が重点化されていないわりに、児童生徒とも肯定的な回答の割合が高い。今ある夢や目標の実現に向けて具体的に動き出す力を育むために、「計画・実行」や「挑戦」「貢献」、課題対応能力の「学ぶ意欲」や「前向きに行動する力」において、発達の段階を踏まえた指導の充実を図る必要があると考えられる。

② 校種比較からわかる傾向

キャリア教育の充実のためには、校種間の連携を活性化し、継続的、発展的取組という視点で考えることも大切である。そこで、以下は校種間較差の大きい項目について考察する。

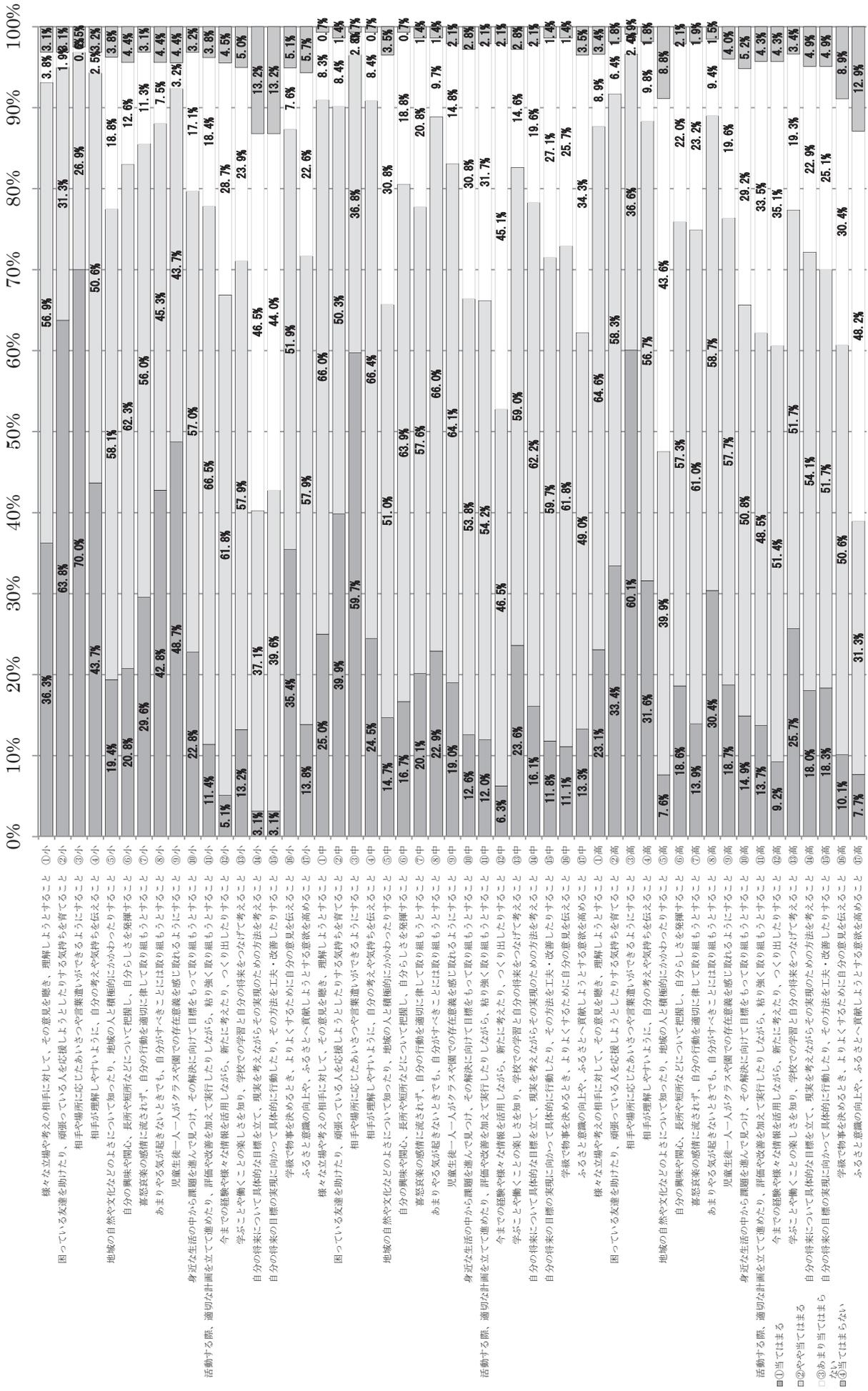
ア 自分の将来の目標と関連付けて考える指導について

小学校の指導において特に肯定的な回答が少ないのがこの項目である。小学校におけるキャリアプランニング能力に関する指導としては、自分の将来と結びつけた指導よりも、「学級で物事を決めるとき、よりよくするために自分の意見を伝えること」といった他者との関わりの中で育む力に重点を置いていることがうかがえる。その一方で、この項目においては中・高等学校の肯定的な回答の割合が高く、小学校との較差が大きい項目である。発達の段階に応じた指導の特性と考えられるが、児童生徒の実態を考えると段階的な指導の充実が望まれる。

イ 地域との関わりやふるさとへの貢献意識に関わる指導について

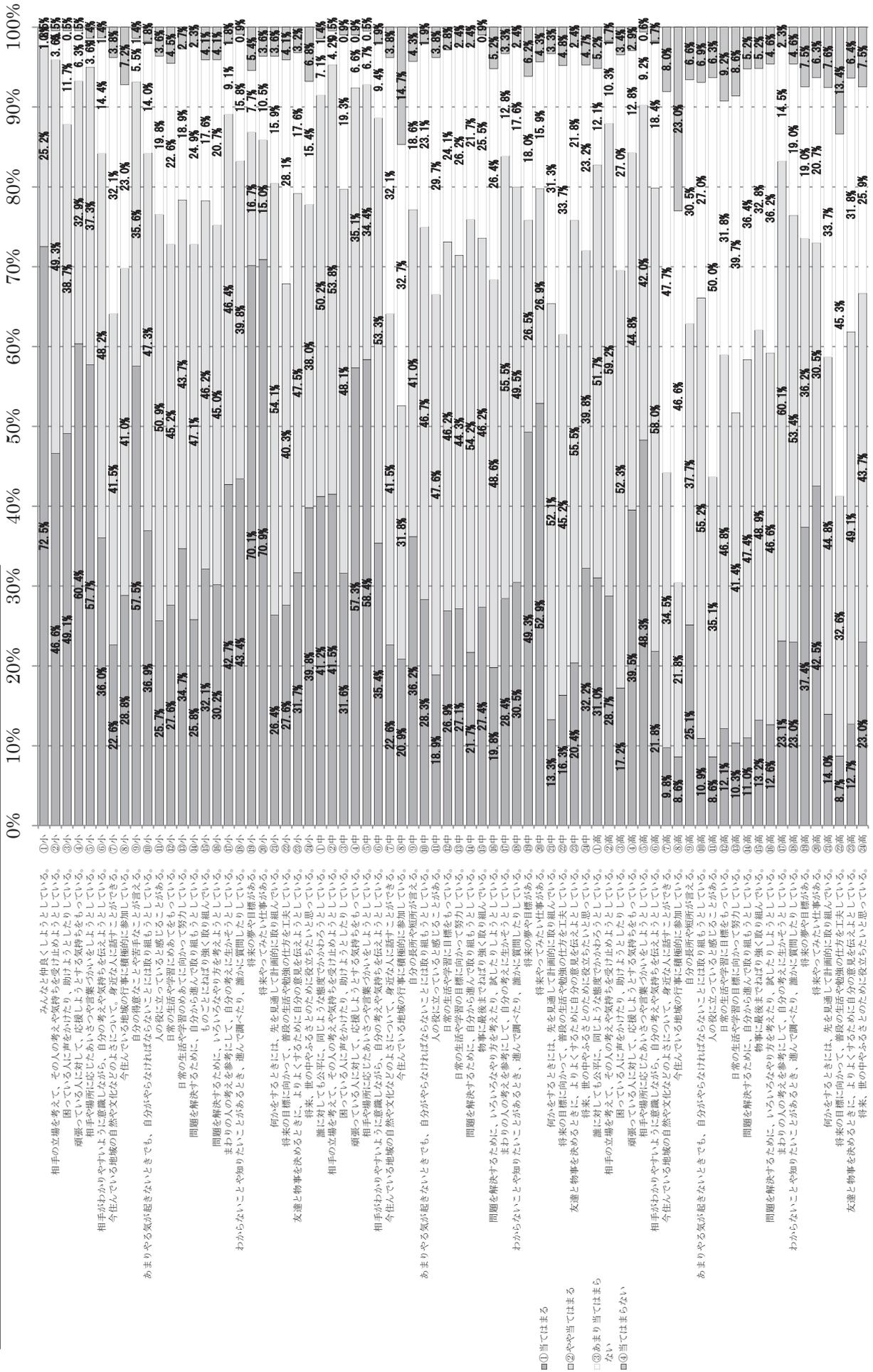
小・中学校と高等学校の較差が大きい項目である。更に、高等学校において肯定的な回答が5割を下回った項目は、この項目だけである。このことから、ふるさと教育と関連させたキャリア教育という視点での支援が課題として考えられる。

グラフ1：教員設問「どのようなことに重点を置いて指導していただけますか。」



活動する際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えたりしながら、粘り強く取り組もうとすること
 □①当てはまる
 □②やや当てはまる
 □③あまり当てはまる
 □④当てはまらない

グラフ2：児童生徒設問「あなたの日常生活の様子を振り返って答えてください。」



(5) 幼稚園教員分析

① キャリア教育への理解に関わる課題

キャリア教育推進が求められる背景や、キャリア教育で育成する「基礎的・汎用的能力」への理解など、キャリア教育に関する知識を得にくい状況がうかがえる。(グラフ3、4)

その理由の1つとしては、キャリア教育に関する研修会に参加する機会が少ないことが挙げられよう。(グラフ5)

また、勤務している学校・園におけるキャリア教育の必要性について「わからない」という回答は、小・中・高等学校の教員は5%程度であるのに対して、幼稚園教員は25%と約4倍である。その理由としては「キャリア教育に関する指導の内容や方法がわからない」ということが1番の理由である。

さらに、キャリア教育を実施する上で、困ったり悩んだりしていることも同様に「キャリア教育に関する指導の内容や方法がわからない」「キャリア・カウンセリングの内容・方法がわからない」と、「わからない」ことを挙げる回答が多い。

勤務している園でのキャリア教育の必要性を約70%が感じており、また、キャリア教育を進める時期としても約半数が就学前～小学校低学年からが適していると考えているにも関わらず、どのように考え、取り組んでいけばよいのかということがわからない教員が多い。

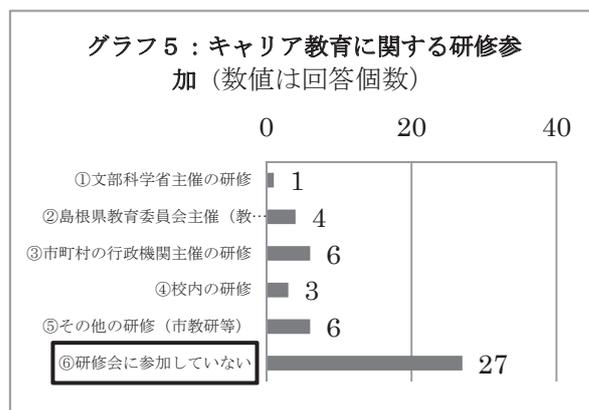
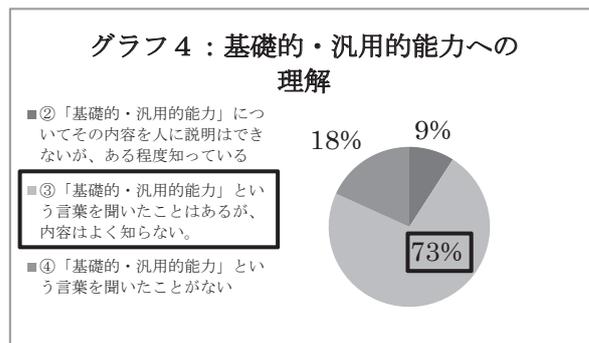
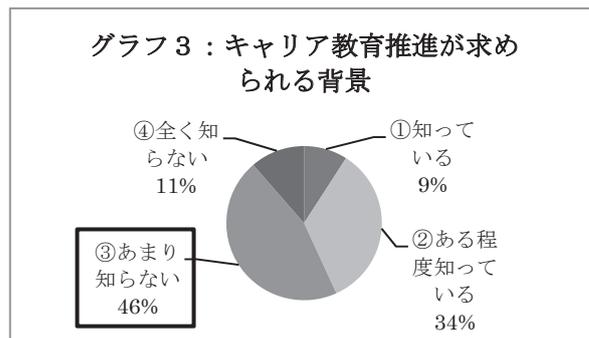
また、「勤務している学校・園におけるキャリア教育推進の必要性を感じない」と回答した半数が「キャリア教育より先にやるべきことがある」「キャリア教育を推進する時間が確保されていない」ということを理由として挙げていた。このことからキャリア教育とは、今やっていることとは別に何かをしなくてはならないという考えがあることもわかる。

以上のことから、今後、キャリア教育に関する十分な知識理解を得ることが出来るような研修の機会や資料の提供等、支援の必要性がうかがえる。

② 実際の取組からわかる強み

上述のように、キャリア教育に関する知識理解という点では課題が見られる一方で、実際にはキャリア教育にふさわしい取組が意欲的に行われていることもわかる。

例えば、地域や家庭の教育力を活用したり、ふるさととのつながりを意識した活動を行ったりなど、身の回りの「ひと・もの・こと」に園児がふれられるような機会の保障である。これ



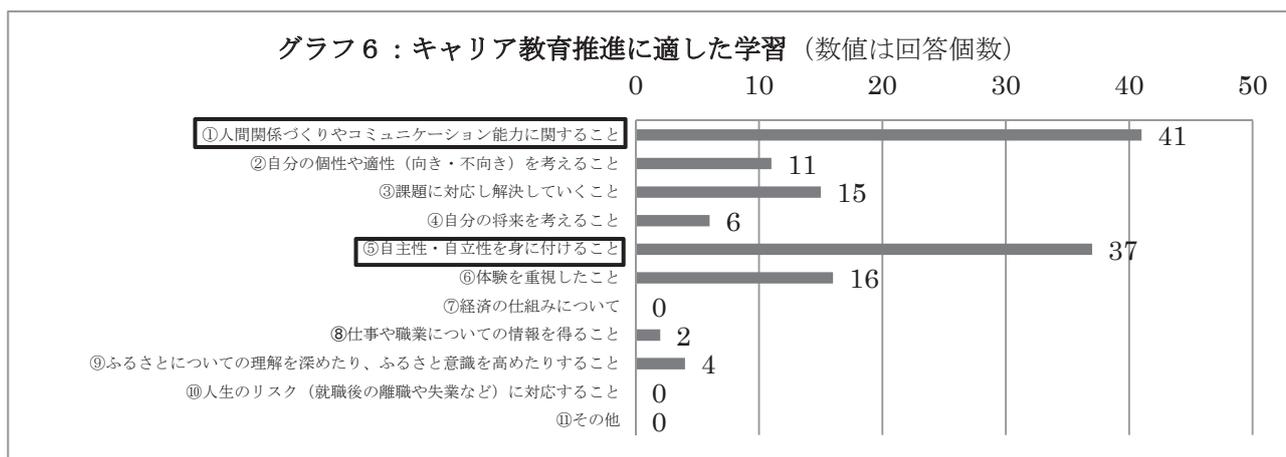
は、しまねの子どもに育てたい力として幼稚園の段階で必要だと考えている「ふれる力」に対応している。幼い頃から、ふるさとの「ひと・もの・こと」に対して好奇心や親しみをもって関わる機会を設けることは、地域への愛着と誇りを育てる基盤となり、キャリア教育推進に効果的な取組であると言える。

また、キャリア教育推進に適した学習として「自主性・自立性を身に付ける学習」や「人間関係づくりやコミュニケーション能力に関する学習」を挙げた回答が約60%となっている。(グラフ6)

これらも「ふれる力」や「やってみる力」に関わる学習である。周囲との関わりの中で、自分の「できること」や「したいこと」などに一生懸命に取り組む過程で、コミュニケーション・スキルや自己コントロールする力などを育むことは幼児期において大切なことであるとする。

以上のことから、幼稚園教員が実際に行っている取組の内容は、方向性として幼稚園という発達の段階で育てる力にふさわしい内容であるとする。

今後は、現在行っている活動をキャリア教育の視点で捉え直し、育てたい子どもの姿をイメージしながら、意図的・計画的な教育活動を行っていくことが大切である。そのためにも、それぞれの発達の段階における目指す姿を共通理解できるような指標を提案するなど、見通しをもって子どもを育てられるような支援が求められていると言える。



(6) 特別支援学校教員分析

① 特別支援学校の実態

特別支援学校においては、キャリア教育を進めるための枠組みとして、中央教育審議会答申で示された「4つの基礎的・汎用的能力」に併せて、国立特別支援教育総合研究所による「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニングマトリックス』」がある。各学校では、これらを参考にしながらキャリア教育の視点で各校独自の方法により授業改善が進められているのではないかと考えられる。

また、特別支援学校には様々な発達の段階の児童生徒が在籍しており、生活年齢や発達の段階等、多面的なアセスメントを基に教育活動が展開されている。小学部(ろう学校においては幼稚部)から高等部まで、縦のつながりを意識した特別支援学校の教育活動は、キャリア教育そのものであるという捉えができる。このことから、特別支援学校においては、キャリア教育

の視点で実態把握や評価方法、授業実践を見直していこうという流れがすでにあるのではないかと推測される。

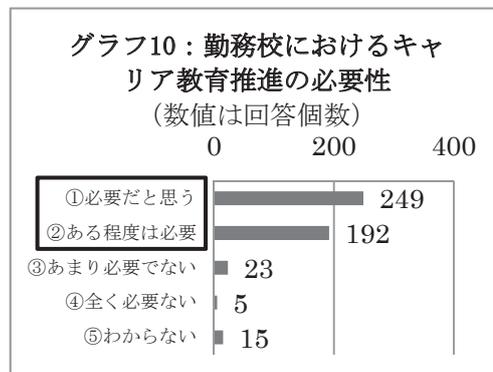
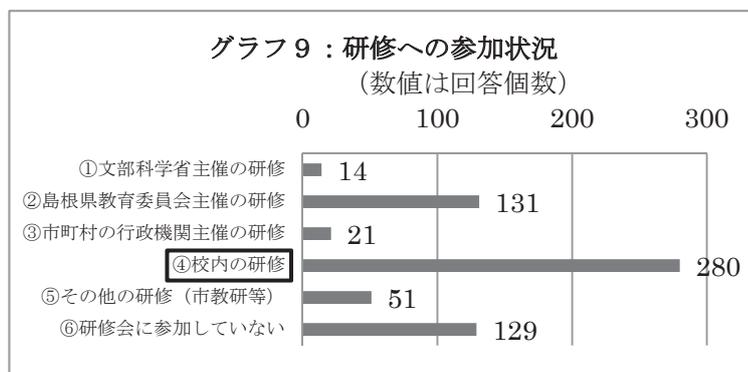
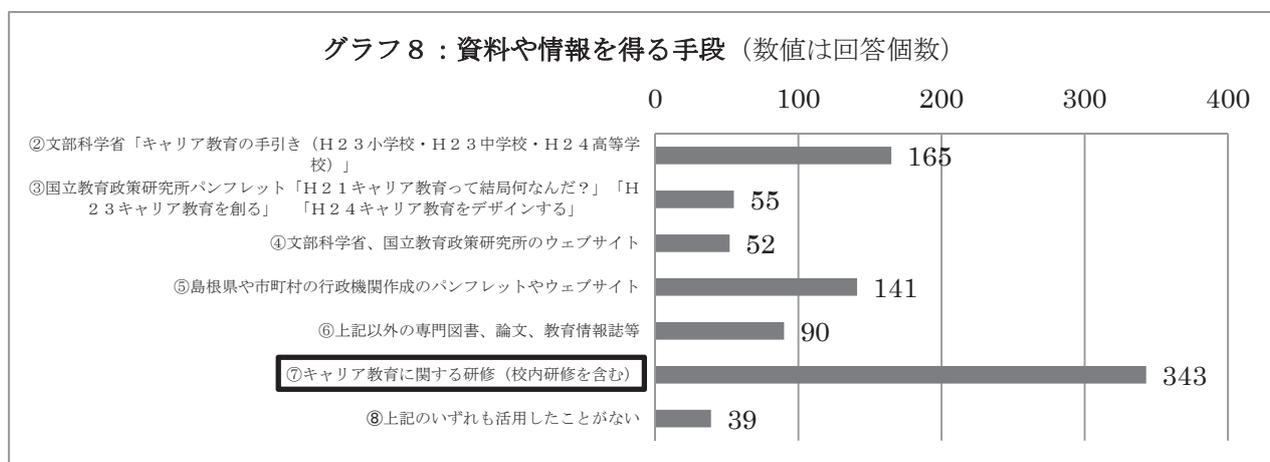
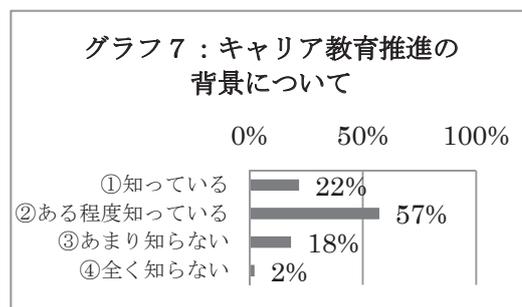
そうした実態を踏まえて以下のように分析・考察を行う。

② 校内研修の充実と計画に基づく実践

キャリア教育推進の背景について、約79%が「知っている」あるいは「ある程度知っている」と答えている。(グラフ7)

その理由として考えられるのが校内研修の充実である。校内研修をとおして、キャリア教育に関する資料や情報を得ている教職員が多く、それが勤務校におけるキャリア教育の必要感にもつながっているのではないかと考えられる。

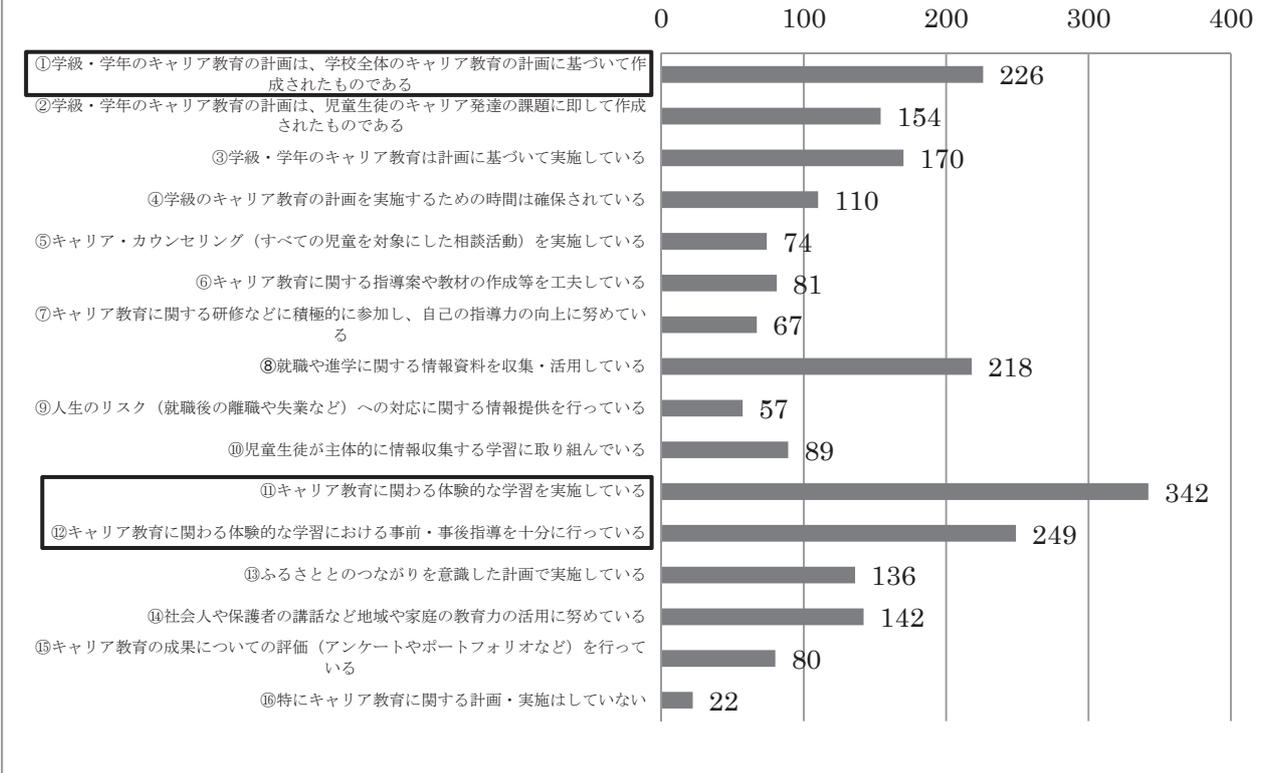
(グラフ8、9、10)



また、取組の実際として、特にキャリア教育に関する体験的な学習を大切にしながら、就労に向けて計画的な取組がなされていることがわかる。特別支援学校においては、現場実習等、社会的自立に向けた細やかな指導実践がなされているだけでなく、そうした活動が、学校あるいは各学部のキャリア教育の計画に基づいて行われている点が大きな特色である。(グラフ11)

学校全体としてキャリア教育を進めていくためには、全教職員の共通理解の下で進むべき方向を共有し取り組むことが大切である。そのための手段として校内研修をうまく活用し、キャリア教育を組織的な取組として位置付けている点は大きな強みであると言える。

グラフ11：取組の実際（数値は回答個数）



③ 具体的な実践例や評価等に関する情報提供の必要性

上述のように、充実した校内研修の下、各校が、学校全体で計画的・系統的な取組を推進している現状を支えていくために、今後、こういった支援が求められているのだろうか。

キャリア教育実施上の悩みを見てみると、「キャリア教育に関する指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」「キャリア・カウンセリングの内容・方法がわからない」といった声が多い。実践を進めて行く中で、具体的な取組という点でさらなる情報を必要としている様子がうかがえる。

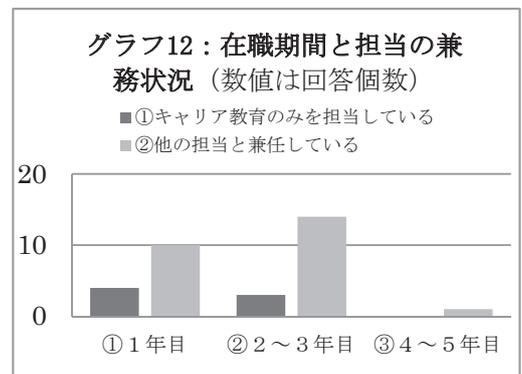
また、キャリア教育の計画はあっても、その具体的な評価の仕方がわからないという状況も見られる。どういう子どもの育成を目指し、何ができるようになることがねらいなのかといった、より具体性のある計画立案のための支援が求められていると言える。

(7) キャリア教育担当者分析

① キャリア教育担当者の在職期間と校務分掌における担当の兼務状況（グラフ 12）

在職3年目までが圧倒的に多く、且つ他の担当との兼務状況にある担当者が多いことがうかがえる。

また、キャリア教育全体計画等の作成主体の結果を併せて考えると、進路指導や校内研究に関わる分掌組織で企画運営されている一方で、キャリア教育に関わる担当者が孤軍奮闘して企画運営している状況もどうか



がえる。

② 全体計画と年間指導計画の有無 (グラフ 13、14)

全体計画の整備は概ね進んでいるが、各学年段階における年間指導計画の整備には課題がある。各学年の発達の段階や地域の実態に応じて、身に付けさせたい力を踏まえた計画の立案が待たれるところである。

③ 全体計画・年間指導計画の内容

(グラフ 15、16、17)

全体計画及び年間指導計画に記されている内容からうかがえる共通の課題は、キャリア教育の評価について多くの学校で計画も実施も行われていないことである。

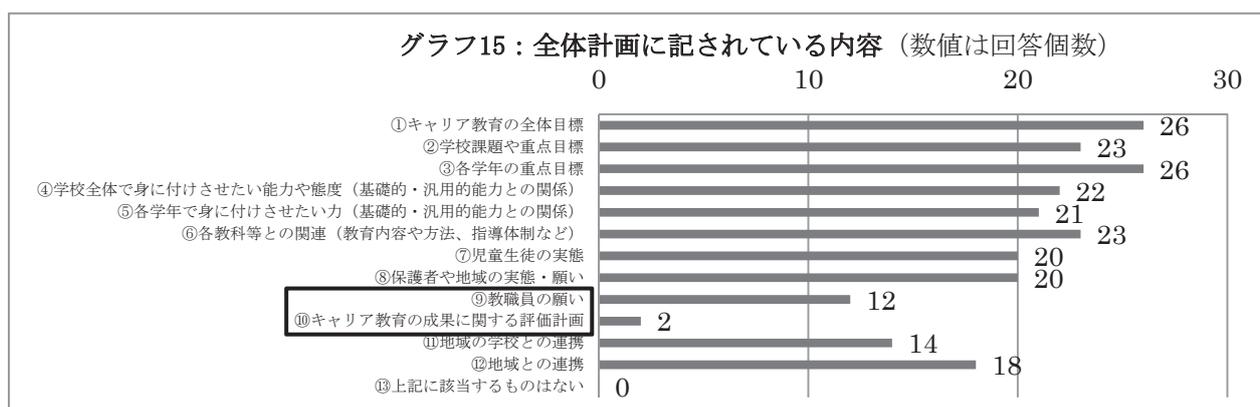
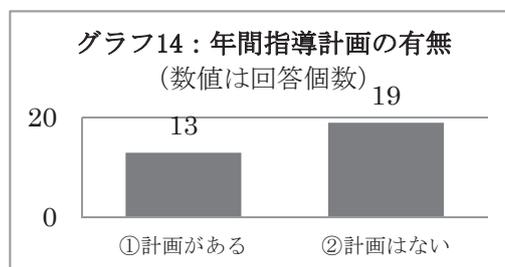
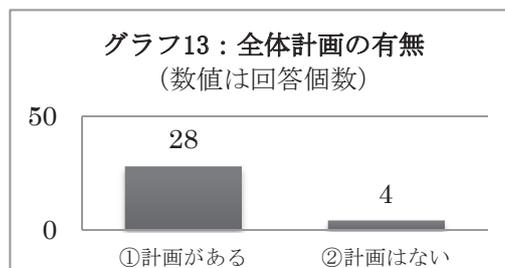
これは、学校や各学年において身に付けさせたい力を基礎的・汎用的能力の関係で捉えている学校は多くあるが、それを具体的に目指す子ども像として捉え直し計画されていないこと、更に、そこには教職員の願いが十分に反映されていないことも起因すると考えられる。

また、キャリア・カウンセリングについては、総合的な学習の時間や学級活動、体験的な活動、各教科等に比べて圧倒的に計画率（実施率）が低いこと、現在の学びと将来の進路との関連を意識付けた指導の工夫にも課題がうかがえる。

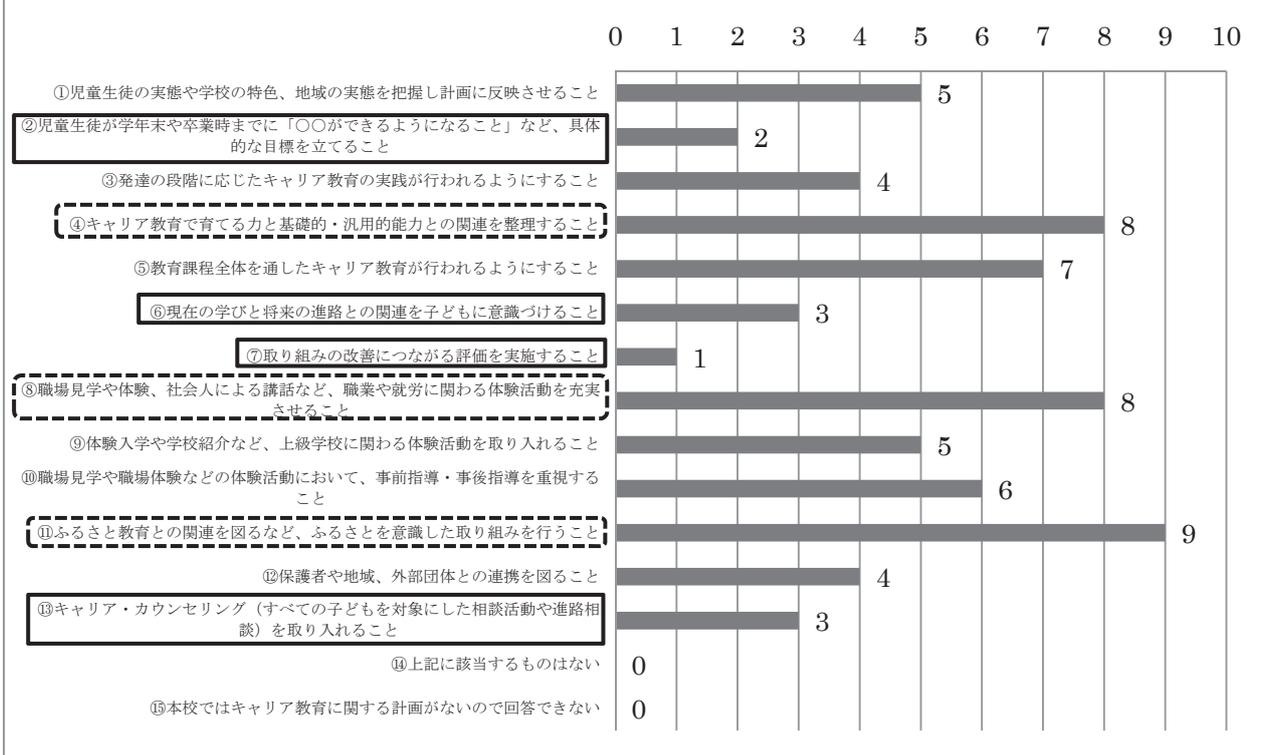
ここに挙げた2つの課題については、全国的に実施されたキャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査結果（国立教育政策研究所）においても指摘されているところである。ただし、キャリア・カウンセリングについては、小学校のみならず、各校種に共通して課題となっていることが本県の特徴である。（国立教育政策研究所の結果では小学校の課題が指摘されている。）

上述した評価とキャリア・カウンセリングに係る課題については、実施のための内容や方法が分からないと回答する教員が2～4割程度存在し、キャリア教育実施上の悩みの中で高位にあるにも関わらず、各学校で実施される研修内容に反映されていないこと、すなわち、その解決のための適切な研修会を計画したり、参加したりする機会が十分でないことがうかがえる。一方、島根の特色を生かしたふるさと教育との関連を図ったり、職業や就労に関わる体験活動を充実させること、教育課程全体で行うキャリア教育で育てる力と基礎的・汎用的能力の関連を整理したりすることに関しては、比較的高い結果が示された。

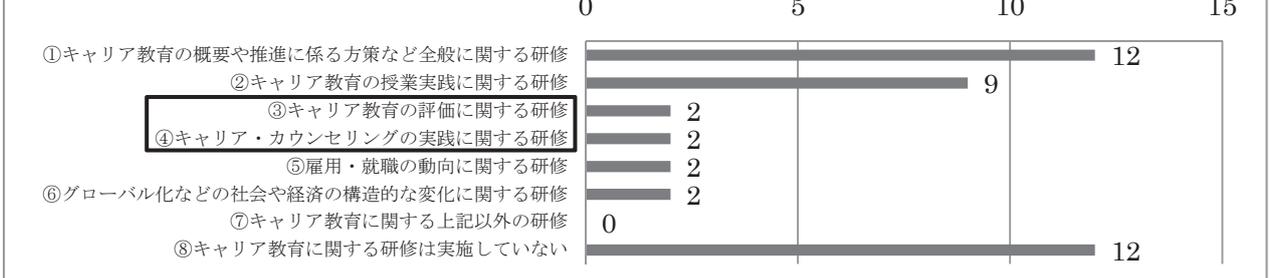
島根の教育の特色の一つでもあるふるさと教育など、今ある実践をしっかりと生かしながらキャリア教育の視点で整理し、県として統一感のある実践へと進化させることが重要と考える。



グラフ16：年間指導計画に記されている内容（数値は回答個数）



グラフ17：学校で実施した研修会の内容（数値は回答個数）



VIII 今後の課題

- 「しまねの子どもに育てたい力と評価項目（案）」に示した「発達の段階で育てたい力の重点」については、1年次分析を基に更にデータ処理と考察を行い、「発達の段階で育てたい力」との関連を含め、再整理することも視野に入れる。
- 「しまねの子どもに育てたい力と評価項目（案）」とともに、島根県の実態を考慮し、今後どのようなキャリア教育の取組が望まれるのか、島根県版の提言として示す。
- 細かく分析・整理できていない設問については、今後の島根県におけるキャリア教育推進に向けた施策の基礎データとして再整理する。
- 幼稚園、特別支援学校における「しまねの子どもに育てたい力と評価項目（案）」については、本研究では示すことができなかった。この点については、小・中・高等学校との関連を含め、より専門的な見地から整理する必要がある。
- 本紀要で掲載した「しまねの子どもに育てたい力と評価項目（案）」については、学校現場において活用いただき、児童生徒のキャリア発達を見取る一つの指針となるように啓発する。

Ⅸ おわりに

本県の教育を進める理念と目指す方向等を示す「しまね教育ビジョン21」の前文には、「〔一「人」は、個人として尊重されます。〕〔一「人」は、家庭や社会のかけがえのない一員として存在します。〕〔一この「人」づくりの原動力は、「教育」にあります。〕と記されている。これは、個々の存在価値を認識するとともに、家庭や社会など個々が属する様々な環境においてかけがえのない存在であることを認識しつつ、学校・家庭・地域社会が連携して、県民一体となって子どもたちを育成していくことを示している。まさしく、キャリア教育の理念をもち、しまねの子どもたちの育成を目指し、県民が同じベクトルで教育を推進していくことに他ならない。

現在の島根県における社会の実態（人口減、高齢化、就業難等）を考えれば考えるほど、子どもたちの将来と本県の将来をも見通した教育が重要であることを実感する。

本研究では、学校教育のレベルにおいて、幼・小・中・高・特が連携し、それぞれの発達の段階に応じた支援をしつつ、その先にある「しまねの目指す子ども像」を見据えた教育推進の大切さについて探ってきた。これまでも、校種間の連携や目標を明確にした教育推進の重要性は言われてきたが、研究推進の中で、改めてその重要性を認識するに至った。

島根県として目指す子ども像を明確にするとともに、県下すべての教職員がその達成に向けて、同じベクトルで教育を推進することが、今、重要である。

ご協力いただいた県内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校及び教育庁各課、県内指導主事、社会教育主事等の皆様には心から感謝を申し上げます。

この研究は島根県教育センター浜田教育センター研究・研修スタッフ 石田浩一、小田公弘、金山悟、澄川由紀、山田あかね、福田由紀、及び教育相談スタッフ 城市博明、落合由美、小寺博喜が共同で行ったものである。

【参考文献・引用文献】

- 小学校キャリア教育の手引き<改訂版>（平成23年5月文部科学省）
- 中学校キャリア教育の手引き（平成23年3月文部科学省）
- 高等学校キャリア教育の手引き（平成24年2月文部科学省）
- キャリア教育資料集一文部科学省・国立教育政策研究所一研究・報告書・手引き編平成24年度版（平成25年5月国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター）
- キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書（概要版）ーキャリア教育の現状と課題に焦点をあててー（平成25年3月国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター）
- キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書（概要版）（平成25年10月国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター）
- 月刊高校教育増刊 キャリア教育の基礎・基本（平成25年12月学事出版）
- キャリア教育の進め方サポートブック（平成24年3月大阪府教育委員会）
- 生きる・働く・学をつなぐキャリア教育の指針<総論編>（平成24年3月青森県教育委員会）
- 仙台「自分づくり教育」の手引き（仙台市教育委員会）
- いわてキャリア教育指針～キャリア教育の推進に向けて～（平成22年3月岩手県教育委員会）
- 平成25年度島根県学力調査報告書（平成25年11月島根県教育委員会）

【資料】

しまねの子どもに育てたい力と評価項目【幼・小・中・高等学校】(案)

発達段階で育てたい力	育てたい力の要素	評価項目 ()は中・高に対応	発達段階で育てたい力の重点			基礎的・汎用的能力
			幼	小	中	
ふれる力(幼)	身の周りの「ひと・こと・もの」に対して、好奇心や親しみをもって、自ら体を動かす力	みんなと仲良くしようとしていますか。 (誰に対しても公平に、同じような態度でかわかわろうとしていますか。)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
かかわる力(小)	「ひと・もの・こと」とふれ合い、自分を表現したり、周りを思いやりたりする体験をとおして、周囲とかわかわり、ふるまいを身に付けていく力	相手の立場を考えて、その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか。 困っている人に声をかけたり、助けようとしていますか。 頑張っている人に対して、応援しようとする気持ちをもっていますか。 相手や場所に応じたあいさつや言葉づかいをしようとしていますか。 相手がわかりやすいように意識しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。 今住んでいる地域の自然や文化などのよさについて、感じたことがありますか。 (今住んでいる地域の自然や文化などのよさについて、身近な人に話すことができますか。)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	人間関係形成 社会形成能力
やってみる力(幼)	自分が見たいことや生活に必要なことに、自分なりのやり方で試行錯誤しながら取り組む力	自分の長所や短所が言えますか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
見つめる力(中)	自己を客観的・肯定的に見つめ、自分の良さや課題を見出し、自分自身をコントロールしながらよりよい生き方を目指す力	あまりやりやることが起きないときでも、自分がやらなければならないことには取り組もうとしていますか。 (幼：自分の「できること」や「したいこと」、「必要なこと」に一生懸命取り組んでいますか。)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	自己理解 自己管理能力
自ら学ぼうとする力(小)	興味・関心のあることや身近な生活のなかから、課題や調べたいことを連ねて見つけ、日常生活や学習にめあてをもって取り組む力	人の役に立っていると感じることがありますか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
やり抜く力(中)	目標の実現や課題解決に向けて自分から進んで取り組み、粘り強く学び行動し続けていく力	日常生活や学習にめあて(目標)をもっていますか。 日常生活や学習のめあて(目標)に向かって努力していますか。 問題を解決するために、自分から進んで取り組もうとしていますか。 ものごとくにねばり強く取り組んでいますか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	課題対応能力
創り出す力(高)	自らの経験や様々な情報等を総合的に活用し、新たな価値を生み出したり、仕組みを創り出したりする力	問題を決済するために、いろいろなやり方を考えたり、試したりしようとしていますか。 まわりの人の考えを参考にして、自分の考えに生かそうとしていますか。 わからないことや知りたいことがあるとき、進んで調べたり、誰かに質問したりしていますか。 将来の夢や目標がありますか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
見通す力(中)	多くの情報や自分の経験を整理しながら、学ぶことや働くことについて具体的な目標を立て、その実現のための方法について考える力	将来やってみてみたい仕事がありますか。 何かをするときには、先を見通して計画的に取り組めますか。 将来の目標に向かって、普段の生活や勉強の仕方を工夫していますか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	キャリア フロンティング能力
切り拓く力(高)	実社会での生活に向けて未来の自分の生き方をデザインし、目標の実現に向けて挑戦し続けていく力	友達と物事を決めるときに、よりよくするために自分の意見を伝えようとしていますか。 将来、世の中やふぶぶぶぶぶのために役立ちたいと思いますか。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	